●高齢者住宅新聞 2020年5月27日号 掲載記事

介護システム、API強化

グッドツリー 現場の生産性向上へ

トピックス

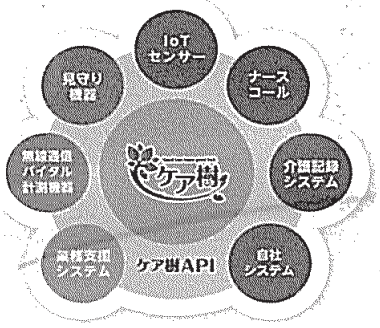
グッドツリー
西原翼社長

クラウド型介護業務支援サービス「ケア樹」を提供するグッドツリー（仙台市）は、他社ソフト・システムとのAPI連携を強化。昨年末より見守り機器や介護記録、シフト管理などとの連携を開始した。

クラウドサービスのケア樹は、iPad・パソコンなどから介護請求・介護記録の機能を低額で利用できることからユーザーを拡大してきた。現在、約2300事業所で導入されている。在宅から施設、総合事業までの機能に幅広く対応している。

順調にユーザーを増やしてきた一方、浮かんできた潜在的なニーズが「データの一元化管理」だ。

介護施設では請求・記録のほかにバイタルや服薬管理、ヒヤリハット、呼び出しなど記録すべきデータは少なくない。一般的にはこれらのデータを異なるメーカーの複数のデバイスで収集しているため、最終的には「手書きによる転記」という作業が必要となる。多忙な介護現場における低生産性の一因でもある。



▲連携先を増やしていく

「すべての機能を1社で提供するのは不可能。独占しようとしてもそれがユーザーのためにならない」（同社）

そこで同社では他社製品とのAPI（アプリケーションプログラミング インターフェース）連携を推進。APIとはソフトウェアやシステム間で互いにデータをやり取りするインターフェースのこと。異なるメーカーであっても情報を収集しやすくなる。

昨年後半よりAPI連携を進め、コニカミノルタQOLソリューションズ、平和テクノシステムなど、現在までにメーカー5社との連携を完成させている。間もなくさらに複数社が参画する予定だという。

請求・記録ソフト、バイタル機器、見守りシステムなど、ユーザーからすれば連携可能なものの方が導入しやすくなる。連携が増えていけば各社の販売戦略にも影響を与えそうだ。